



## 「バウンドテニス」で全国大会準優勝 加我京子さん(元町)

硬式テニスと違い、狭いコートでネットの高さが低く、下からサーブを打ち上げる「バウンドテニス」。町内に平成元年に設立された協会の会員で、昨年の全国大会（シングルの部）準優勝に輝く。14年度の町スポーツ賞受賞者。全国大会で（ダブルスの部）では、平成11年にベスト16位・昨年にベスト8位などの実績を残している。登別出身。夫・敏（さとし）さん、子・汐織（しおり）さん、友寛くん・直也くんの5人暮らし。

「もともとスポーツが大好きで、中学・高校と軟式テニスをしていました。当別に住むようになってからは、硬式テニスやバドミントンを少ししていましたが、当時、現在ダブルスを組んでいる方の誘いで、バウンドテニスを始めるようになったんです」と話す加我京子さん。

加我さんは昨年夏、東京で開かれた「第20回全日本バウンドテニス選手権大会」（日本バウンドテニス協会主催）で、全国から99人が出場した女子シングルス・フリー（16歳以上45歳未満）の部で見事、準優勝を果たしました。3年前に次男の直也くんが生まれた後にアキレス腱を切ったため、およそ1年は全く練習できなかったものの、2年前から体づくりに励み、昨年の大会では「全く予想していない結果となり驚きました」と話すほどの好成績を収めました。

ここ最近では町内でも、軽いボールを打ち合うミニバレーやミニテニスなどの「軽スポーツ」で汗を流す方が多くなってきていますが、昭和55年に日本で生まれたバウンドテニスも、その一つ。

ルールは硬式・軟式テニスや卓球と似ていて、ボールは軟式テニスよりも小さく固めで、サーブは腰の高さよりも下で打ち、1ゲーム（4ポイント）ごとに交互に行うものです。

コートは幅3m・長さ10mと硬式テニスの6分の1、ネットの高さは50cmと低く、ラケットは通常のものよりも柄が短いため、小学生から高齢者までの幅広い世代でプレーすることができ、

全国の愛好者は推計で45万人とされています。

「（バウンドテニス）知らない方も多いかもしれませんが、やればやるほど奥が深いんです。最初は通常のコートよりも狭いので難しかったんですが、慣れてくれば自由に打ち分けるようになってきます。軟式・硬式テニスのように、横向きになって壁を作りながら正面に打ち返さなくても、ボールを飛ばすことができるので、腰をひねったりせずに、年齢や体力に関係なく楽しくプレーできるんです」と微笑みます。

そんな加我さんは、総合体育館で週に2回、ラリーを中心に練習しているほか、札幌でも月に1回、他団体との交流試合などを通じて様々な方と接し、自身の技術力の向上などに努めています。

「無理なく続けることができるので、大会で上位入賞を目指すということよりも、今後、いつまでも元気に楽しむ「生涯スポーツ」にしていきたいですね」と笑います。

